

2013年度学生研究発表大会の総括

学生研究発表大会教員世話役

経済学部教授 望月和彦

本年度の学生研究発表大会をゼミから見ると経済学部9ゼミ，社会学部3ゼミ，経営学部2ゼミ，国際教養学部1ゼミ1講義となり，学部では法学部を除くすべての学部から参加があった。参加ゼミ数は15であり昨年度に比べて2増加している。報告数（映像出品も含む）は50と昨年度より9減少したが，これは1つのゼミからの参加を原則として5グループに制限したからである。

参加学生数は196人と昨年度169人に比べて27名増加し，年々大規模なイベントになりつつある。昨年度は4教室に分かれて大会を実施したが，そのうち2会場では4時間を超える事態となり，また報告の評価も会場ごとで行っていたために基準が統一されないという問題もあった。

そこで今年度はゼミ当り報告数を原則として5つまでとし，予選と本選の2段階選抜を行うことで，本選での評価の基準を統一しより公正な評価ができるように仕組みを変えた。

そしてそれまですべての報告に対して専門性を考慮したコメンテーターの配置を行ったが，予選では会場ごとにコメンテーターを配置し専門性を緩めることとした。また予選での報告およびコメントをより短くすることで，予選全体の時間を短縮することとした。また映像の出品が増えたので，映像だけを別の会場で行うこととした。その結果，今年度の会場数は5となり，昨年度より1つ増えた。

その結果，予選全体の時間はほぼスケジュール通りに進み，長いところでも2時間半ほどで終了した。

現在本学は慢性的な教室不足になっており，イベントの運営が難しくなっ

ている。これは本大会にも当てはまり、通常の講義教室が確保できなかったことから予選はゼミ教室で行うことになった。これは昨年度までの形式で大会を行うことは不可能であったことを意味する。ゼミ教室では収容人員に限界があるためイベントの運営は格段に難しくなったが、学生およびゼミ担当教員の協力のおかげでスムーズな運営が行われた。

予選の審査員の先生方も専門とは異なる報告に対しても熱心なコメントを頂き感謝している。本大会はプレゼンテーションを主眼とするもので、専門性は重視するが、専門的な内容をいかにうまく相手に伝えるかを競うイベントであると考えれば、専門外の審査員に対しても分かりやすく説明する努力が求められる。

2段階選抜制度導入の総括

このように本年度から予選と本選の2段階選抜制度を導入した。これによって本選の水準は相当高くなり、外部の人たちに見ていただいても恥ずかしくないようなレベルに達しつつある。これは2段階選抜のプラスの効果であると思われる。

報告の水準が高くなったことからコメントをする教員にもそれなりの準備が必要となり、コメントの水準も高くなって、学生と教員の間で学問的な真剣勝負が行われる場面も見られた。これは従来の大会ではなかったことであり、コメンテーターの先生には大きな負担となるが、これは大学教育にとって非常に良いことであると思われる。

他方、2段階選抜方式導入により本大会の性格は大きく変容したように思われる。それは本選に残った報告の多くには共通の特徴があることから分かる。

本選に選ばれた報告の多くは適切なテーマを選定し、その先行研究を踏まえた上で計量または理論分析を行うという極めてオーソドックスな手堅いスタイルをとっている。これは研究である以上、ある意味で当然のことであり、予選の審査員もこれを高く評価した。

またこのような高い報告水準に達するまで学生を指導されたゼミの担当教

員の指導力及び労力に対しても高く評価されるべきである。そしてこのような指導の仕方はゼミ指導の一つのガイドラインとなり、この大会自体が大学のFD活動の一環となることで本大会の意義の一つになると思われる。

しかしその結果として本選に出てくる報告が、水準には達しているもののスタイルとして似通ったものに偏ってしまい、ある種の多様性が失われているのではという印象が残った。

また本大会はプレゼンテーションの大会であり、内容もさることながらそれを伝えることに主眼が置かれているが、自分たちが何を伝えようとしているかよく理解できていないのではないかという報告もあったように思われる。

内容が難しくなれば理解することも難しくなり、それを伝えることはもっと難しくなる。内容・理解・表現のバランスをとることがプレゼンテーション大会では求められるように思われる。

これは学生研究発表大会の評価の基準の見直しにつながることはあるが、これからは内容だけではなくプレゼンテーションにより重点を置いた評価基準を考えていきたい。例えば予選において審査員は内容について質問をすることで学生の理解度のチェックを行う、また自分の言葉で話しているかどうかを審査基準とするといった改定を行いたい。

世話役としては、この大会をゆくゆくは外部に公開し、審査員も高校教員や企業の人たちにしてもらって入試広報にも貢献できるようなイベントにしたいと考えている。そのためには少々未熟ではあっても学生特有の着眼点から問題を分析し自分の言葉で報告するというものがもっとあった方がイベントとしては面白いものになり、外部の審査員にもお願いしやすくなるのではないかと考える。

いずれにせよ、この学生研究発表大会は状況の変化に応じてそのやり方や審査基準を変更し、発展させていくべきものであると考える。最後にこの大会に関わったすべての教職員・学生のみなさんのご協力に心より感謝申し上げます。

以上